

## I. 導入

おはようございます。今朝は、パウロがピシディア州のアンティオキアの会堂で語ったメッセージをどのように結論付けたか見ていきたいと思います。パウロはすでに、イスラエル史の至るところで与えられた来たるメシアの預言について語りました。また、イエス・キリストの生誕と死、そして復活によって預言者たちの言葉が成就したことも示しました。そしてパウロは、ある警告をもって自分のメッセージを締めくくります。



では、使徒言行録 13:40-52 をお読みしましょう。

## II. 聖書朗読：使徒言行録 13:40-52 (新共同訳)

13:40 それで、預言者の書に言われていることが起こらないように、警戒しなさい。 13:41 『見よ、侮る者よ、驚け。滅び去れ。わたしは、お前たちの時代に一つの事を行う。人が詳しく説明しても、／お前たちにはどうも信じられない事を。』 13:42 パウロとバルナバが会堂を出るとき、人々は次の安息日にも同じことを話してくれるように頼んだ。 13:43 集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神をあがめる改宗者とがついて来たので、二人は彼らと語り合い、神の恵みの下に生き続けるように勧めた。

13:44 次の安息日になると、ほとんど町中の人々が主の言葉を聞こうとして集まって来た。 13:45 しかし、ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたみ、口汚くののしって、パウロの話すことに反対した。 13:46 そこで、パウロとバルナバは勇敢に語った。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。 13:47 主はわたしたちにこう命じておられるからです。『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、／あなたが、地の果てにまでも／救いをもたらすために。』 13:48 異邦人たちはこれ聞いて喜び、主の言葉を賛美した。そして、永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。

13:49 こうして、主の言葉はその地方全体に広まった。 13:50 ところが、ユダヤ人は、神をあがめる貴婦人たちや町のおもだった人々を扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、その地方から二人を追い出した。 13:51 それで、二人は彼らに対して足の塵を払い落とし、イコニオンに行った。 13:52 他方、弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。

## III. 教え

パウロは次のように言って、人々に注意を促しています。(使徒 13:40) 「それで、預言者の書に言われていることが起こらないように、警戒しなさい。」パウロは、ハバクク 1:5 を引用し、警戒しなさい、気をつけなさい、と人々に警告しています。(使徒 13:41) 「見よ、侮る者よ、驚け。滅び去れ。わたしは、お前たちの時代に一つの事を行う。人が詳しく説明しても、／お前たちにはどうも信じられない事を。」



聖書を学ぶことは、大きな祝福です。みことばを知ると、信仰が強められ、あらゆる形で私たちのクリスチャンとしての歩みを助けてくれます。しかし、聖書を学ぶときは、自分の解釈の仕

方を過信しないように気をつけなければなりません。預言者ハバククの時代、ユダヤ人たちは神のなさること、なさらないことくらいわかっていると思い込んでいました。すると、神は予想外のことをなさいました。600年後、イエスの時代のユダヤ人指導者も同じ過ちを犯しました。神のなさろうとすること、そしてその方法まで自分たちはわかっていると思っていたのです。彼らの祖国イスラエルはローマ帝国によって制圧されましたが、待ち望むメシアを神が送ってくださり、ユダヤ人をローマ帝国から救ってくださると彼らは確信していました。預言は正しく知っていましたが、その解釈は間違っていました。

メシアは予想通り来られました。しかし、ローマ帝国軍から人々を解放するためではありません。イエスは、政治や軍事上の救済をもたらすために来られたものではありません。イエスが来られたのは、もっとはるかに大きな目的のためでした。それは、イエスを信じるすべての人に、罪と死からの救いを与えることです。パウロは、ピシディア州のアンティオキアの会堂で語ったメッセージの前半で、このことを人々に知らせました。

これは、ユダヤ人が予想していたのとはずいぶん異なる救いでしたから、多くの人はとまどいました。とくに、パウロがメッセージで語った次の2点は、ユダヤ人には衝撃的だったでしょう。

まず、パウロはイエス・キリストの復活を強調しました。使徒 13:32-33a 「13:32 わたしたちも、先祖に与えられた約束について、あなたがたに福音を告げ知らせています。13:33 つまり、神はイエスを復活させて、わたしたち子孫のためにその約束を果たしてくださったのです。」メシアが死んで復活することなど、ユダヤ人は想像もしていませんでした。預言者たちはこのことについて語りましたが、そのような預言はあまり注目されませんでした。ユダヤ人指導者や律法学者の期待に沿う預言ばかりに興味向けられていたのでしょう。



次にパウロが強調したのは、イエスを信じる信仰によって与えられる救いと罪の赦しは、世のすべての人に提供されており、旧約聖書のモーセの律法に優るという点です。使徒 13:38-39 「13:38 だから、兄弟たち、知っていただきたい。この方による罪の赦しが告げ知らされ、また、あなたがたがモーセの律法では義とされえなかったのに、13:39 信じる者は皆、この方によって義とされるのです。」当時のユダヤ人は、自分たちのためだけにメシアが来られると信じていました。他の国や民を救うと神が言われた預言も知ってはいましたが、彼らの解釈は、神が異邦人をユダヤ教に改宗させてユダヤ人にし、モーセの律法のもとに置くことで救うというものでした。モーセの律法から独立した救いなど考えもつきませんでした。しかし、これも預言されていたことです。

パウロは、自分の教えはユダヤ人にとってあまりに意外な受け入れがたいものであることをわかっていました。しかし、これを軽視して信じようとしないうという落とし穴に落ちないようにと警告します。話を聞いていた人には、その注意を無視して、信じようとしないう人もいました。しかし、このことについてもっと知りたいと思った者もいました。使徒 13:43 「集会が終わってからも、多くのユダヤ人と神をあがめる改宗者とがついて来たので、二人は彼らと語り合い、神の恵みの下に生き続けるように勧めた。」

この時点では、もめごとが起こりそうな雰囲気はありません。パウロとバルナバは会堂に迎えられ、話すように勧められて、イエスについて次の週にもっと話してくれるようにと頼まれました。そして、集会が終わると、多くの聴衆が彼らの後について行き、この新しい教えについてもっと聞こうとしました。

パウロとバルナバがどのようにその一週間を過ごしたかはわかりません。街角や市場で人々に話していたかもしれませんし、戸別訪問で人を訪ねたかもしれません。これと言って特別何もしなかったかもしれません。しかしどういふわけか、次の安息日には、会堂で何か特別なことがあるらしいと町中の人たちが聞きつけたようです。使徒言行録の著者ルカは、**使徒 13:44**にこう記しています。「**次の安息日になると、ほとんど町中の人**が**主の言葉を聞こうとして集まって来た。**」ピシディア州のアンティオキアは比較的小さな町だったと思われませんが、それでも、会堂や周囲の道は人であふれかえっていたことでしょう。

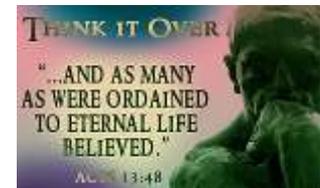


残念ながら、このことをうれしく思う人ばかりではありませんでした。**使徒 13:45**「**しかし、ユダヤ人はこの群衆を見てひどくねたみ、口汚くののして、パウロの話すことに反対した。**」現地に住むユダヤ人は、町の人を会堂に来て交わりに加わるように促そうと長年努めてきたでしょう。そして、成功例もいくつかはあったようです。というのも、そこに改宗者がいたと書いてあるからです。けれども、このような大群衆が押しかけるとは夢にも思っていなかったでしょう。



これほど大勢の人々が訪れたその日、現地のユダヤ人たちは、神のみことばを聞きに彼らの小さな会堂へたくさんの人たちが集まってくれたことを喜ぶこともできました。しかし、彼らはそうしませんでした。喜びではなく、にわかにな人気者となったパウロとバルナバに対するねたみを選びました。英語では、嫉妬やねたみを緑色であらわすことがしばしばありますが、嫉妬に燃えた緑の怪物は、あらゆる悪影響を及ぼす感情です。家族や教会、国々までも破滅させるものです。私たちは皆、すべてを壊す緑の怪物から心を守る必要があります。嫉妬やねたみは、自分や周囲に危害を加えるものであり、誘惑の数々をもたらすものでもあります。

会堂での事情は暗転しましたが、パウロは救いの賜物について話すことができました。また、福音を受け入れ、嫉妬に燃えるユダヤ人より良い選択をする人々もいました。**使徒 13:48**「**異邦人たちはこれを聞いて喜び、主の言葉を賛美した。そして、永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。**」異邦人は喜びました。そして、神のみことばを受け入れることを選びました。同様に、救いの福音を喜び、神のみことばを受け入れるのは、私たちにとってもよいことです。



パウロとバルナバは、イエスについて、そして復活の良き知らせについてのメッセージをピシディア州のアンティオキアにもたらしました。しかし、聴衆はそれぞれ違った反応をしました。あざける者もあれば、もっと知ろうとする者もありました。説教者をねたむことを選ぶ者もいれば、信じて喜ぶことを選ぶ者もいました。神と神のみことばにどう応答するか、私たちも一人ひとり選ばなければなりません。しかし聖書には、神も選ばれることが明言されています。48節はこう語ります。「**永遠の命を得るように定められている人は皆、信仰に入った。**」この個所から、誰が信じて救われるのか神が選ばれたことが示されています。これに抵抗を感じる人もいます。というのも、神が選ばれたことで、自分には選択の余地がないと感じるからです。しかし、神の選択を喜ぶという選択をすればよいのにと私は思います。

神の選択と人間の選択がどう機能するのか、教理や道理に矛盾を生むことなく、この両者がどう選択できるのか、などについて、聖書個所を深く掘り下げる時間は今日はありません。実際、神学者たちでも長年この問題と格闘しています。しかし、聖書がはっきり示しているのは、神が選択されたこと、そして、私たちにも選択を迫っていることです。どんな例えも完全ではありませんが、両者が選択しなければならない別のシチュエーションとして、結婚を例に挙げたいと思います。

男性と女性が結婚するためには、両者がそうすることを選ばなければなりません。通常、男性がプロポーズして女性がそれを受け入れます。しかし男性は、女性が「はい」と言ってくれるという確信を得てからプロポーズしたいと思います。とは言え、断られるリスクは常にあります。お互いを100%理解することはできないからです。しかし、神は私たちを完全にご存知です。神は、この世をお創りになる前から、私たちのことを完全にご存知です。ですから、私たちが神からのプロポーズを耳にする前に、神は確信を持って結婚を発表することがおできになります。聖書は、結婚前の男女の例をとって、救い主イエスと私たちの関係を表します。



**黙示録 19:7** は、この世の罪を取り去る神の小羊イエスとその花嫁である教会の結婚を預言という形で垣間見せてくれます。「わたしたちは喜び、大いに喜び、／神の栄光をたたえよう。小羊の婚礼の日が来て、／花嫁は用意を整えた。」イエスにぜひ「はい」と言いましょ。そして、永遠の命を受ける者として私たちを選んでくださった神の選択を喜びましょ。そうするなら、大いなる祝いの日に備えることができるでしょう。その祝いの日とは、すべての教会が主とともにいるために天に帰る日です。

この話題から離れる前に、**使徒 13:46** も見ておきましょう。「そこで、パウロとバルナバは勇敢に語った。『神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者にしている。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。』」永遠の命を得るに値しない者と決めたのは誰でしょう。パウロは、彼らが自分自身でそれを決めたと言っています。この人たちは、自分自身を永遠の命を得るに値しない者としてしまったのです。

一見すると、自分を値しない者と呼ぶのは謙虚なように見えます。しかし、そのような態度は実際には高慢から来ています。考えてみてください。神があなたを永遠の命へと招いておられ、神があなたをふさわしいと判断しておられます。そこにあなたが自分はふさわしくないと言うのです。それは、神に反論することであり、神の判断より自分の意見を重視することです。自分の意見のほうが神の判断より上だと思えば、それは自分本位の思い上がりです。

もちろん、己の言動に基づくなら、永遠の命に値する人は誰もいません。しかし、イエス・キリストを信じる信仰によって、私たちはふさわしいとされるのです。イエスと十字架上の御業を信じる者には、イエスの義が与えられるからです。キリスト・イエスにあって、私たちはふさわしい者とされているのです。イエスの血潮が私たちを罪から洗い清めてくれるからです。**ローマ 5:1** 「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、」

パウロとバルナバは、ユダヤ人のねたみによって、ついにピシディア州のアンティオキアから追い出されてしまいました。しかし、そのような反対で落胆したりはしませんでした。彼らは動くことなく次の場所でイエスとその復活を宣べ伝えました。来週は、イコニオンでのできごとについてお話ししますが、彼らがピシディア州のアンティオキアを悲しみながら去ったのではないことを覚えておいてください。むしろ、**使徒 13:52** はこう語ります。「他方、弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。」私たちも、迫害や困難の中でも喜ぶことを身につけることができるようにと祈ります。

#### IV. 結び

今日メッセージを終える前に、もうひとつお話ししたいことがあります。まず、**ヨハネ 8:12** でイエスが言われたことを覚えていますか。イエスは「わたしは世の光である。」と言われました。イエスは100%善



良で真理のお方です。イエスはこの世の光です。このお方の光のおかげで、暗闇の中でも多くの人々を救いに導く神の働きを見ることができます。

しかし、**マタイ 5:14** でイエスは、「**あなたがたは世の光である。**」とも言っておられるので、困惑する人もいます。一見矛盾とも思える個所ですが、そんなことはありません。というのも、私たちの光は、ただイエスの光を反射しているにすぎないからです。太陽は輝いて地球に光を差します。月は自分からは光を發しませんが、太陽の光を反射することで、地球に光をもたらします。同じように、私たちは光を發しませんが、イエスの光を映し出すなら、この世に光をもたらすことができます。



今日の聖書箇所で、**使徒 13:47** は非常に興味深い聖書箇所です。「**主はわたしたちにこう命じておられるからです。『わたしは、あなたを異邦人の光と定めた、／あなたが、地の果てにまでも／救いをもたらすために。』**」パウロは、メシアに関する預言をイザヤ書 49:6 から引用していますが、同時にこうも言っています。「**主はわたしたちにこう命じておられるからです。**」イエスについての預言がパウロへの命令とはどういうことでしょうか。ヨハネ 8:12 とマタイ 5:14 をたった今見ましたから、答えは簡単です。イザヤはキリスト・イエスが世の光であると語りました。そして、イエスに従う者は、イエスの光を映し出すことによって世に光をもたらすように命じられています。ですから、パウロがこの預言を主から自分への直接的な命令だと受け取っても当然のことです。



そして、これがパウロへの直接的な命令であったなら、私たちへの命令でもあるでしょう。パウロと同様、私たちも世の人々のために光となるよう命じられています。イエスの光を輝かせ、世の果てまでも救いが及ぶためです。私たちが生きているのは暗闇の世界であり、光を必要としています。神が私たちを置かれた場所でキリストの光を輝かせ、この世に光をもたらすことは、私たちの使命です。

祈りましょう。

## V. 祈り